

日本宋代文学学会 第六回大会

—プログラム—

- 日時： 2019年 5月18日(土) 9:30開場 10:00開始
- 会場： 金沢大学角間キャンパス
北地区人間社会第2講義棟4階401講義室 (添付のPDF参照)
- 参加費： 1,000円

午前の部 10:00~11:45

- 9:30 開場／受付開始
10:00 会長開会あいさつ 大阪大学 浅見 洋二
主催校あいさつ 金沢大学 原田 愛

(I) 10:15~10:45 : 欧陽脩詞の「詩化」について

大阪大学大学院博士前期課程 張 亜琳
(司会) 岡山大学 藤原 祐子

(II) 10:45~11:15 : 宋詩における啄木鳥 —寄託の深層化—

日本学術振興会特別研究員PD 早川 太基
(司会) 青山学院大学(非) 加納 留美子

(III) 11:15~11:45 : 微物之義: 宋代談物文化中的譜録寫作

ハーバード大学東アジア言語・文明系博士候補生 麥 慧君
(司会) 岡山理科大学 奥野 新太郎

—昼休み(11:45~13:00)—

- ・理事会 12:00~12:20 (人間社会5号館4F 国語科演習室)
- ・評議員会 12:20~12:50 (人間社会5号館4F 国語科演習室)

午後の部 13:00~17:00

(IV) 13:00~13:30 : 南宋士人の交流と文学 —『歳寒堂詩話』を手がかりに—

京都府立大学大学院学術研究員 白崎 藍
(司会) 明治大学 甲斐 雄一

(V) 13:30～14:00 : 蘇軾詩における「汝」

青山学院大学(非) 加納 留美子
(司会) 金沢大学 原田 愛

(VI) 14:00～14:30 : 陸游詩の自注について

明治大学 甲斐 雄一
(司会) 愛知大学 三野 豊浩

(VII) 14:30～15:00 : 史部文章入集的文体学考察 —以宋代為中心—

陝西師範大学 蔣 旅佳
(司会) 同志社大学 副島 一郎

——休憩(15:00～15:30)——

(VIII) 15:30～17:00 : シンポジウム

JSPS基盤研究(B)「唐宋八大家散文の特色とその受容に関する総合的研究」主催
日本宋代文学学会共催

第四回 唐宋八大家シンポジウム

司会: 九州大学 東 英寿

1 柳宗元作品裡的南來諸賓

国立東華大学 張 蜀蕙

2 王安石詩經學の朱熹詩經學に對する影響

慶應義塾大学 種村 和史

1 惠州期以降の蘇軾に於ける儒仏の交錯

京都大学大学院(非) 陳 佑真

——休憩(17:00～17:10)——

■総会 17:10～17:40

懇 親 会

19:00～

■会費 5,000円前後

■会場 旬魚季菜 とと桜 (<https://totozakura.owst.jp/>)

■大会会場(金沢大学角間キャンパス)■

アクセス方法

【飛行機を利用して小松空港から来る場合】 小松空港 - 金沢駅 高速連絡バスで40分～50分

【電車を利用する場合】

- ・東京方面から JR利用 東京駅-金沢駅 北陸新幹線 約2時間30分
- ・大阪/京都方面から JR利用 大阪駅-京都駅-金沢駅 特急サンダーバード 約2時間40分
- ・名古屋方面から JR利用 名古屋駅-金沢駅 新幹線, 特急しらさぎ 約2時間40分

【路線バス】 バスは大学キャンパス内を周回しますが、終点の「金沢大学」でお降り下さい。

- ・金沢駅→金沢大学(北陸鉄道バス 金沢駅東口6番のりば、360円) 40～50分ほどかかります。
 - ・香林坊→金沢大学(北陸鉄道バス、360円)
 - ・兼六園下・金沢城→金沢大学(北陸鉄道バス、360円)
- *タクシーの場合、金沢駅→金沢大学で3,500円くらいで、20分ほどです。

●昼食 各自ご持参いただくか、大学内の食堂をご利用ください。

- ・金沢大学北地区 大学会館食堂 大学会館2F 土曜11:00～13:30
- ・金沢大学北地区 大学会館購買 大学会館1F 土曜 9:00～14:00
- ・金沢大学南地区 南福利食堂 フレポ 南福利施設 土曜11:00～13:30

*南地区は理系です。添付のキャンパスマップをご覧になればわかりますが、かなり遠いです。

準備の都合上、5月8日(水)までに、「大会・懇親会」の出欠をメールでお返事くださいますようお願いいたします。皆様のご参加をお待ちしています。

大会幹事 原田 愛
yuantian46@yahoo.co.jp

— 発 表 要 旨 —

〔午前の部〕

I. 欧陽脩詞の「詩化」について

大阪大学大学院博士前期課程 張 亜琳

欧陽脩の詞は、従来の詞の枠組みに大きな変化をもたらした。その最大の特質の一つとして注目すべきは「詩化」、すなわち「詞の詩への接近」であろう。欧陽脩詞における「詩化」については、すでに多くの研究で言及されている。しかし、それらのほとんどは詞の題材・機能の拡大や豪放な風格について論じたものであり、詞の表現そのものに着目した詳しい分析はまだ十分とは言えない。本論文では、従来の研究の欠を補うべく、伝統的な詞や詩との対比を踏まえ、欧陽脩詞における「詩化」の特質について、人物・空間・時間の三つの視点から考察を加えてみたい。

具体的にいえば、欧陽脩詞の人物描写には士大夫像や老衰の自我像、集団的な人物像など、従来の詞にはほとんど見られない人物像が表現されており、この点において詩と接近する傾向を持つ。また、空間描写の面では、抒情を目的としない純粋な空間描写や詩句の借用により、通常の詞よりも広大な、詩に類する空間が表現されている。そして、時間描写においては、長いタイムスパンからなる時間表現と時間に対する論理的思考が特徴的である。前者は欧陽脩生身の経験を反映するものであり、彼の詞を系年する上でも参考になる。後者は晏殊の詞にもよく見られ、広く北宋前期の詞における「詩化」傾向の中に位置づけることができると考えられる。

II. 宋詩における啄木鳥 —寄託の深層化—

日本学術振興会特別研究員(PD) 早川 太基

発表者はさきに「琵琶曲『啄木』攷——宋代文人の聴いた音楽」（『東方學』第一三六輯）にて宋代に流行した啄木鳥をテーマとした琵琶曲「啄木」を論じたが、本発表では續編として、宋人における啄木鳥自體へのイメージを探る。啄木鳥は、中國文学では夙に魏晉から登場するが、主に（一）蟲を退治する善鳥、（二）同時に樹を傷つける悪鳥という二面性が詠われる。宋代になると、たとえば梅堯臣と欧陽脩とが啄木鳥を詠んだ詩文では、従来の「蟲」と「啄木鳥」とに、更に「人」という要素を加えた三者の関係から多面的に、樹の保護や、啄木鳥の境遇にまで話が展開される。歐・梅の作品はともに景祐・慶暦年間の複雑な政争関連の内容と見なせられ、これは啄木鳥というテーマの政治化である。この延長線上において、不遇の才子たる李廌の詩「啄木鳥」では、「蟲」を残酷に食べる「啄木鳥」の行爲を潔しとしない「自己」を描き出すのには、ある種の反抗の意を汲みとれる。このように宋人の詠う啄木鳥は、前代の関係性の型のうえに、さらに異なる他者を加えるという手法により、比興寄託の度合いを高め、同時に「善鳥」「悪鳥」を超越した単一ならざるイメージを形成している。

III.

微物之義：宋代談物文化中的譜錄寫作

哈佛大學東亞語言與文明系博士候補生 麥 慧 君

本論擬以“談物”文化 (the discourse on things) 來概括興起於北宋仁宗朝（十一世紀上半葉）文人對外部世界中的物產和器物進行觀察、整理與書寫的熱潮。談物文化所涉及的物品多種多樣，但其中大多都是在先宋的文學傳統中微不足道、甚至有“玩物喪志”之虞的物--是為“微物”。大致包括以下幾類：文人書齋清玩及文房用具（筆墨紙硯、書畫、古器物、石、香），動植物（牡丹、蘭、竹、菊、海棠、梅、蟋蟀），日常用品、食物及地方特產（荔枝、橘、蟹、菌菇、砂糖、茶、酒）等等。以物為主題的書寫散見於詩、詞、文、筆記等多種文體，本論主要探討譜錄類文本，一則因為譜錄作為專門書寫物產的文體，在宋代發展至自成一體，從其體例結構可窺見宋人如何觀物；二則譜錄品類繁多，並與地方書寫及帝國的統治秩序有深刻勾連，是重新評估宋代談物文化之多義性和公共政治性的關鍵。

譜錄作為一種文學文本近來逐漸受到學者重視，日本學者小川環樹氏、歐美學者艾朗諾氏和Martina Silbert氏已分別從博物學、美學和目錄學層面對宋至明清的譜錄作出了意義重大的開創性論述。然上述諸說側重討論譜錄作為撰者個人情志和博物趣味的體現，而未注目譜錄在宋初興起時的公共政治性。其次，關於宋代譜錄的先行研究較多關注典型個案（如歐陽脩《洛陽牡丹記》、蔡襄《荔枝譜》及各種茶錄等），對於其他文本并未予以重視。本論指出：北宋譜錄寫作熱潮興起時正值宋廷調動朝官與地方職官編修地方志，以便觀政；而這一時期的譜錄多出自在地方任官的士大夫之手。本論通過分析現存譜錄文本的寫作背景、結構與範式，試圖論證北宋譜錄作為文人配合帝國統治之一環之意義。“談物”之公共政治性，在於文人通過書寫地方物產配合宋廷將地方納入帝國政治秩序；譜錄文本中反復出現的為微物賦值的訴求，也是這一思潮的體現。談物文化的博物興味、審美意趣，並非與政治功能毫無關聯，相反，談物文化對物的審美恰恰可能是日常與政治的審美化。

【午後の部】

IV.

南宋士人の交流と文学 — 『歳寒堂詩話』を手がかりに—

京都府立大学大学院学術研究員 白崎 藍

南宋詩話において、強い文学的主張と体系的な理論を備えたものは至極少ない。その第一に挙げられるのは巖羽『滄浪詩話』であろう。『歳寒堂詩話』『白石道人詩話』は『滄浪詩話』との内容的な類似性が早くから指摘され、先駆的な作品として位置づけられてきた。

しかし、これらの詩話の具体的な関係性には不明な点が多い。特に『歳寒堂詩話』は版本を永樂大典以前には遡れず、南宋の蔵書目録にも見られない。作者の張戒について

語られた文章も少なく、出版された形跡も見当たらない。南宋におけるこの書のありようについてはかなりの疑問が残るのである。

本発表では、南宋における『歳寒堂詩話』の作者、張戒をめぐる状況を軸に、『歳寒堂詩話』が影響を及ぼし得た範囲を考える。張戒の交友関係や、その中でも誰が『歳寒堂詩話』の読者になり得たのかを手がかりに、政治的主張・学派・地縁などによる南宋士人の交流の様相を調査し、やがて『滄浪詩話』のような詩話を生むに至った土壌について考察を行う。

ひいては、嚴羽の交友関係から、南宋後期の福建建陽における文人のありようについても一考し、そこに『歳寒堂詩話』の影響が届き得たのかについて考えたい。

V. 蘇軾詩における「汝」

青山学院大学非常勤講師 加納 留美子

本発表は蘇軾詩における「汝」という表現——特に「東府雨中別子由」詩に見える「汝」に着目し、考察するものである。

元祐八年（1093）九月、新たな任地である定州（河北）への出立を控えた蘇軾は、弟の蘇轍へ向けて留別の詩「東府雨中別子由」を送った。その全句は以下の通り。「庭下梧桐樹、三年三見汝。前年適汝陰、見汝鳴秋雨。去年秋雨時、我自廣陵歸。今年中山去、白首歸無期。客去莫歎息、主人亦是客。對牀定悠悠、夜雨空蕭瑟。起折梧桐枝、贈汝千里行。歸來知健否、莫忘此時情」。ここで着目したいのが、末尾の四句「起折梧桐枝、贈汝千里行。歸來知健否、莫忘此時情」である。一体誰が「起折梧桐枝」をしたのか、「贈汝」以下の言葉は誰が述べたものなのか、「汝」とは誰を指すのか。

詩題に照らして本詩が兄から弟へ向けた留別の詩だと「確認」することで、「千里行」する「汝」とは定州へ旅立つ兄の蘇軾を指し、翻って「起折梧桐枝」をしたのは弟の蘇轍だと解釈できる。一方で主客が即座に判断しかねる要因には、本詩で生じる人称代名詞「汝」の飛躍が考えられる。本詩の冒頭に立ち戻れば、蘇軾の視点で「汝」と呼びかけるその対象は梧桐である。だが九句目より「主人」と「客」を主語に論が展開されることで、その後登場する「汝」は、梧桐との繋がりが断たれてしまう。そこへ主語も無く「起折梧桐枝」句が現れるために、再度「汝」が登場しても誰を指すのか、読み手を戸惑わせてしまうのだ。

蘇軾は何故、弟の蘇轍に、兄に対して「汝」と語らせたのか。送別の場で梧桐を枝折る行為は、樂府題「折楊柳」に基づく想像される。だが『樂府詩集』収載の作品では、思い慕う相手は「君」と表現され、「汝」を用いた例は見られない。伝統の楊柳ではなく別れの場に寄り添っていた梧桐を選んだように、「汝」もまた蘇軾が意図的に選んだ可能性はないだろうか。その場合、「汝」が蘇軾にとってどのような意味を——本来の二人称の他に——持っていたのか、確認する必要がある。

相手への尊崇の意を込める「君」に比べ、「汝」が指す対象は、年下の友人や親族、庶民や使用人など、より広範な存在を指す。そして面白いことに、蘇軾の場合、その対象には蘇軾自身も含まれていた。つまり他者を指すのではなく、「汝」と自分自身に呼びかけている、そのように解釈する外ない例が複数あるのだ。「汝」のように、蘇軾詩には読み

手を当惑させる程の自在な呼称表現が用いられている。そうした文脈に則って「東府雨中別子由」詩を捉え直した場合、「汝」はどのように解釈できるのか。些か卑見を述べたく思う。

VI. 陸游詩の自注について

明治大学 甲斐 雄一

陸游の詩に付される注釈は、彼の詩集『劔南詩稿』が自身や彼の息子たちによって編まれたという経緯に鑑みて、自注であることは間違いないと言える。『劔南詩稿』に見える900条に近い自注が、詩の制作時期の特定や内容の読解を助けること、また詩の本文から離れて語彙や当時の社会を知る史料的价值を有することについては、すでに莫礪鋒氏が論じている（「論陸游詩自注的価値」、『中華文史論叢』2012年4期）。

発表者は以前、陸游「菴中晨起書觸目」四首の分析において、詩題の「目に触るるを書す」という現実に応じたタイトルに対し、詩の本文が多分に虚構の世界を構築していることを分析したが（「連作詩の精読—陸游「菴中晨起書觸目」四首の分析を通して—」、日本中国学会2017年度『研究集録』）、そこでも自注は重要な役割を果たしていた。本発表は、先行研究の整理を基礎としつつ、詩の本文と注釈を併せて読むことによって生じる効果について考えてみたい。

VII. 史部文章入集の文体学考察 —以宋代为中心—

陝西師範大学 蔣 旅 佳

总集汇聚不同作者一类或多类作品成集，创始于晋挚虞《文章流别集》。《文选》作为流传至今最早文章总集，大致继承《文章流别集》编纂体例而成。萧统选文，或从别集辑选，或据前贤总集录入，以独立成篇的作品为主。宋以前，文章总集的编纂体例与选文标准，基本是按照《文选》模式设置的。宋代总集存世数量浩大，形态功能多样，编纂旨趣也较以前更为丰富。宋代总集一个非常重要的创举，就是将文学经典的范围扩展到子、史两部。《会稽掇英总集》《古文集成》《崇古文诀》《妙绝古今》《文章正宗》《文选补遗》等大量收录《左传》《战国策》《国语》《史记》《汉书》《后汉书》《晋纪》《宋书》等史部文献入集。

史部文章的入集，最早可溯源至《文章流别集》《文选》。《文章流别集》纂录《汉书》序赞而立“《汉》述”一目，《文选》“史论”“史述赞”剪裁《汉书》《晋纪》《后汉书》《宋书》成文。萧统选录“史论”、“史述赞”为“文”，更多地关注其声律、对偶、辞藻、用典特质，这与当时整个时代风尚是相契合的。《文选》将“史论”“史述赞”与“论”“赞”并列，已然注意到区分史籍截录作品与其他“篇什”之别。至于史书他文，萧统则严

守文学本位，概不录入。宋代总集开始打破《文选》以来的选文体例，大量采摘史部文章入集，形成文章经典。这其实反映了宋人一种新的文章观念与眼光，与当时的学术风尚密切相关。其中，古文运动和程朱理学对文道关系的讨论是史部文章入集的重要契机。

史部文章的入集，实质上涵括两个阶段的操作：一是篇章选择与命名，即篇章化；二是文体认定与归类，即体类化。编者最先从史籍中选录部分文本，重新命名，使其独立成篇。篇章的节录与命名，其实也涵括者文体认定与归类的意味，特别是分体编录的总集中，篇目形态的改造与重构一开始就沿着突出文体特征的方向而展开。因此，节录及重构的史部文本在相当程度上体现了编纂者的文体及文学观念。

值得注意的是，因总集编者各自文学观念差异，其选文倾向也颇不相同。对比不同总集，相同段落的文本，其篇题可能各有差异，因此也会被划分为不同文体类别。宋代总集选文分类中的“同文异题”“同文异体”现象，与其史部文章“命篇”和“命体”的方式与过程相互关联，由此，可以挖掘蕴含其中深层的文体观念。不仅如此，宋代总集选录史部文章入集的命篇与命体，很大程度上又影响到了明清总集的选文与分类。明清总集如《文章辨体汇选》《古文奇赏》《古文辞类纂》等将节录史部文章加以命体，形成如本纪、实录、仪注、书志、世表、说书、年谱等新的文体名称，大大地丰富了中国古代文体形态。

* * *

VIII. シンポジウム

JSPS基盤研究(B)「唐宋八大家散文の特色とその受容に関する総合的研究」主催

日本宋代文学学会共催

第四回 唐宋八大家シンポジウム

司会 九州大学 東 英 寿

昨年5月の本学会で産声をあげた「唐宋八大家シンポジウム」。昨年度の開催は3回を数え、今回で早くも第4目を迎えます。今回は、唐宋八大家の中から柳宗元、王安石、蘇軾の3人を取り上げ、多様な観点からそれぞれのテーマに切り込んでいきます。

1 柳宗元作品裡的南來諸賓

國立東華大學 張 蜀蕙

後人關注柳宗元南行書寫，常就其個人情志與山水作品論之，視為柳宗元一己感懷。然而柳宗元所處永州、柳州，看似荒陬窮邑，卻在南行湖湘路上，乃出入嶺南、安南要

道。十餘年歲月飄忽、人事變化，柳宗元筆下有別於永貞元年前，書寫的京城人物。而是另一幅時代人物圖象：或道途匆匆，仕宦官吏、遊方僧人、隨行而至的親友。柳宗元或寄贈詩文，以見其心志。或為曾經南行、或死於南方官吏親友作墓誌、哀祭文，道其生平與南行的經歷。透過柳宗元之筆，這些南來諸賓，或為佐僚、遷謫、開府、遊方，因南行開啟人生特別的篇章，留下功業與個人身影。本文探究柳宗品寫作用意，以期對這些南來的人們有更多認識。

2 王安石詩經學の朱熹詩經學に對する影響

慶應義塾大学 種村 和史

『三經新義』の一つ『詩經新義』は、詩經の正統的な解釋を示すために王安石等によって撰述され世に廣められたが、王學の衰微とともに亡逸したため、それが當時の學術にどのような影響力を發揮したのか、それが詩經解釋學史においてどのように位置付けられるか十分に明らかにされていない。しかし、斷片的ではあるがそれを考えるヒントとなり得るかもしれない資料が、南宋の詩經學の著述の中に散見される。本發表では、毛詩大序の一節についての王安石の學說と關係を持つと思われる朱熹詩篇解釋の經說を手掛かりに、朱熹が王安石の學說から何を學んだか、そのことが朱熹の詩經學の體系にいかなる影響を及ぼしたか、ひいては朱熹が受けた王安石詩經學からの影響が、後の詩經解釋學史の展開にどのような作用を及ぼしたかを考えてみたい。

3 惠州期以降の蘇軾に於ける儒仏の交錯

京都大学大学院非常勤講師 陳 佑 真

蘇軾の仏教受容については多くの研究があるが、湯淺陽子氏の研究は、蘇軾の詩文に於ける仏教語彙の利用の時間的變遷を論じ、早期には表層的な用例が大多数を占めていたものの、後には惠州で書かれた「思無邪齋銘」など、仏教を取り扱って深遠な思考を展開する例が登場することを明らかにした点で重要である。

「思無邪」は『詩』魯頌並びに『論語』に見られる語であるが、それに対する蘇軾の解釈は「凡そ思ひ有る者は皆邪なり」に始まる異質なものである。その発想の原点が蘇轍から送られた仏語にあることが「思無邪齋銘」には記されているが、『論語說』佚文や惠州期の他のいくつかの作品を分析するに、蘇軾の「思無邪」解釈は単純な仏教への傾倒、或いは儒家からの乖離とはいえず、儒家・道家を含む多様な思想の交錯を背景にもつ。

本報告は蘇軾の「思無邪」解釈の背景にある、混成的な思考の姿を明らかにすることを目的とする。蘇軾の「思無邪」解釈は仏教の影響を強く受ける一方で李翱「復性書」をも強く意識したものであり、復性説の受容と唐以来の性説への反撥、仏教への関心と在家者としての意識といった対立軸を切り口に分析することが有効であろう。

— 以上 —